

平成28年度 あきたスマートカレッジ (報告)

D連携講座

D16～19：発見！ミュージアムゼミ

連携機関：県立博物館

会場：秋田県生涯学習センター4階 第1研修室

【趣旨】博物館職員が展示や専門の分野について分かり易く解説する講座です。

講座記号	期 日	テーマ	講 師	参加者数
D16	5月19日 (木)	「博物館の舞台裏で 見える展示の见えないしくみ」	普及・広報班 主査(兼) 学芸主事 鈴木秀一氏	14
D17	8月5日 (金)	「秋田の昆虫」	展示・資料班 班長(兼) 梅津一史氏	15
D18	10月7日 (金)	「発掘された日本列島2016」	普及・広報班 主査(兼) 学芸主事 吉川耕太郎氏	26
D19	12月9日 (金)	「四季の楽しみ、くらしのいろどり」	展示・資料班 主査(兼) 学芸主事 丸谷仁美氏	21
合計				76名

それぞれの専門分野について詳しくお話を聞くことができました。
ここでは、4回目の講座について報告します。



日本全体が高度成長期に入った昭和30年代、秋田県には大きな変化がありました。関東圏への集団就職による若者の流出や農家の出稼ぎの増加、生活改善運動や電化製品の普及による生活の変化といったことも重要ですが、宿泊施設の不足から民泊で行われた昭和36年の秋田国体は「まごころ国体」とも呼ばれ、県外の方々と新たな交流を生み、「観光化」という大きな変化を生み出します。つまり、「竿灯祭り」や男鹿・十和田といった「県内の観光地」はこの国体を通じて全国的に認知されるようになり、翌年には当時の国鉄東北支社が青森ねぶた・仙台七夕・秋田竿灯を巡る「東北三大祭り観光列車」の運行を始め、より多くの観光客が訪れるようになったのです。そしてこの頃から、「伝統的な祭り・年中行事」が「見せる祭り・年中行事」へと徐々に変化し始めました。つまり、「観光化」と「伝統を守りたい」という意識の狭間で、各地で「祭り・年中行事」の開催日が変更されたり、日数が増えたりということが起こり始めたのです。そして現在は少子高齢化の時代に入り、再び「祭り・年中行事」も変化しようとしています。今回の展示はそのような「県内で最も変化の著しかった昭和30年代後半の暮らしとともに、四季それぞれの祭りや年中行事がどのように変化したか」に焦点を当てたものだそうです。講師の丸谷先生は「今回の展示は将来を考えるきっかけとなっただけならば」と話されていました。

このような話をうかがい、「祭り・年中行事」の意義を再確認し、その将来像を皆で語って行く必要性を参加者一人一人が確認する場になりました。